

ヨーロッパ世界の変容と展開

中世の西ヨーロッパの社会や支配の仕組みは十字軍の遠征をきっかけに^{へんよう}変容し、^{きょうこうけん}教皇権が衰える一方で各国では王権が成長した。ロシア・東欧も独自の道を歩んだ。

Q▶ いわゆる中世ヨーロッパにはどのような特徴があり、それはどのようにかわっていったのだろうか。

1 西ヨーロッパの封建社会とその展開

Q▶ 十字軍をきっかけにして、西ヨーロッパにはどのような変化が生まれたのだろうか。

教会の権威

Q▶ 中世の西ヨーロッパでは、なぜローマ＝カトリック教会が普遍的な権威をふるったのだろうか。

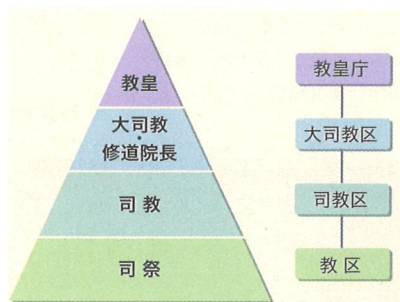
中世の西ヨーロッパでは、王権が貧弱で統一的権力になれなかったのに対し、ローマ＝カトリック教会が西ヨーロッパ世界全体に普遍的な権威をおよぼした。教皇を頂点とし、大司教・修道院長・司教・司祭など、聖職者の序列を定めたピラミッド型の階層制組織がつくられ、大司教や修道院長などは荘園をもつ大領主でもあった。その末端には各農村におかれた教区教会があり、司祭が日常的に農民の信仰を指導した。

教会は農民から十分の一税を取り立て、独自の裁判権さえもっていた。

一方、皇帝や国王などの世俗権力は、しばしば本来は聖職者ではない人物(俗人)をその地位に任命し、教会に介入するようになった。

こうして教会が世俗権力の影響を受けると、聖職売買など様々な弊害が生じた。これに対して10世紀以降、フランス中東部のクリュニー修道院を中心に改革運動がおこった。教皇グレゴリウス7世はこの改革を推し進め、聖職売買や聖職者の妻帯を禁じ、また、聖職者を任命する権利(聖職叙任権)を世俗権力から教会の手に移して教皇権を強化しようとした。

ドイツ国王(のち神聖ローマ皇帝)ハインリヒ4世はこれに反発し、ここから叙任権闘争が始まった。ハインリヒは改革を無視しようとしたため、ついに教皇は彼を破門した。さらにドイツ諸侯は破門解除がなければ国王を廃位すると決議したため、1077年ハインリヒはイタリアの



カトリックの階層制組織

た。ドイツ国王(のち神聖ローマ皇帝)ハインリヒ4世はこれに反発し、ここから叙任権闘争が始まった。ハインリヒは改革を無視しようとしたため、ついに教皇は彼を破門した。さらにドイツ諸侯は破門解除がなければ国王を廃位すると決議したため、1077年ハインリヒはイタリアの

① 聖職叙任権をめぐる、ドイツ国王・神聖ローマ皇帝に代表される世俗権力とローマ教皇との争い。



カノッサの屈辱 ハイリント
4世(中央)がクリュニー修道
院長(左)とトスカナ女伯(右)
に教皇へのとりなしを願っ
ている場面。

①耕地を3つにわけ、それぞ
れを秋耕地・春耕地・休耕地
として年ごとに順次利用して
いき、3年で一巡する土地利
用法(→p.100図)。



インノケンティウス3世

カノッサで教皇に謝罪して許された(カノッサの
屈辱)。その後、1122年のヴォルムス協約で両者の
妥協が成立し、ここに叙任権闘争は終結した。教
皇権は13世紀のインノケンティウス3世の時に絶
頂に達した。

十字軍とその影響

Q 十字軍はその後の西ヨーロッパにどのような影響を
与えたのだろうか。

11～13世紀の西ヨーロッパはおおむね気候が温暖で、三圃制^①の普及
や犁・水車の改良など農業技術の進歩により農業生産は増大し、人口も
飛躍的に増えた。それにともない西ヨーロッパ世界は、しだいに内外に
向けて拡大しはじめた。修道院を中心にした開墾運動、オランダの干拓、
エルベ川以東への東方植民、イベリア半島の国土回復運動(レコンキスタ)、
巡礼の流行などがそれである。なかでも大規模な西ヨーロッパの拡大が、
十字軍であった。

11世紀に東地中海沿岸に進出し、聖地イエルサレムを支配下においた



中世の農耕 アルプス以北の湿って重い土壌を深く耕すため、11～12世紀頃から図のような重量有輪犁を牛馬に牽かせる農耕法が普及し、農業生産が増大した。『フランドルの時禱書』より。

セルジューク朝は、アナトリアにも進出してビザンツ帝国をもおびやかしたので、ビザンツ皇帝は教皇に救援を要請した。教皇ウルバヌス2世は1095年にクレルモン宗教会議を招集し、聖地回復の聖戦をおこすことを提唱した。こうして翌96年各国の諸侯や騎士からなる第1回十字軍が発発し、99年イエルサレムを占領してイエルサレム王国をはじめとする十字軍国家を建てた。

その後、勢いを盛り返したイスラーム勢力に対して第2回十字軍がおこされ、ついで、アイユーブ朝のサラーフ=アッディーンに再び奪われた聖地を回復するために、神聖ローマ皇帝・フランス国王・イギリス国王が参加して第3回十字軍がおこされたが、いずれも成功しなかった。つづく第4回十字軍は、ヴェネツィア商人の要求にせまられて聖地回復の目的を捨て、その商業上のライバルであるビザンツ帝国のコンスタンティノープルを占領してラテン帝国を建てた。その後も第7回まで十字軍はおこされたが、聖

パレスチナにおける十字軍活動の中心となった海港都市アッコが、1291年にマムルーク朝の攻撃を受けて陥落したことで十字軍は終了した。



十字軍と西ヨーロッパ勢力の拡大 (11~13世紀)

サラフ＝アッディーンの軍に攻撃されるエルサレム
中央に聖墳墓教会とキリスト像がみえる。聖地は再び奪われ、これが第3回十字軍のきっかけとなった。

地回復の目的はついに達成されなかった^②。この間、聖地への巡礼の保護を目的として、ドイツ騎士団などの宗教騎士団が結成され、各地で活躍した。

十字軍は結局失敗したが、その後の西ヨーロッパ世界に重大な影響を与えた。あいつぐ遠征の失敗により教皇の権威はゆらぎはじめ、諸侯や騎士のなかには没落する者も多かった。逆に遠征を指揮した国王の権威は高まった。また、十字軍の輸送によりイタリアの諸都市は大いに繁栄し、地中海貿易による東方との交易が再び盛んになった。これにより東西間でヒトとモノの交流が活発になると、ビザンツ帝国やイスラーム圏から文物が流入し、西ヨーロッパ人の視野は拡大した。こうして十字軍をきっかけに、中世の西ヨーロッパ世界は大きく変容しはじめた。

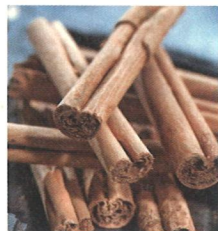
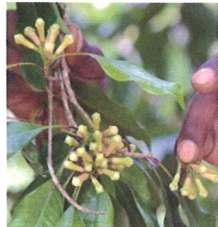
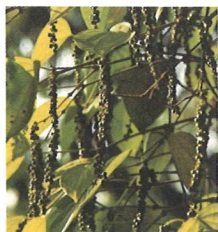


② 少年十字軍のように民衆の熱情的動機からおこされ、悲劇的結末に終わった運動もあった。

商業の発展

Q 西ヨーロッパで商業が盛んになった理由は何だろうか。

封建社会が安定して農業生産が増大した結果、余剰生産物の交換が発達になり、都市と商業が発達しはじめた。また、ムスリム商人やノルマン人の商業活動によって、貨幣経済が大きな広がりをみせるようになった。さらに十字軍の影響で交通が発達すると、毛織物工業の発展を基礎に遠隔地貿易で発達する都市も現れた。11~12世紀には、このように都市や商業が急速に発展した。



香辛料 アジアからもたらされた香辛料は、もともと奢侈品であったが、しだいにヨーロッパ人の生活必需品ともなっていた。写真は上からコシヨウ・クローヴ・ナツメグ・シナモン。

中世の店先 都市の発達にとともに、商人の活動も活発となり、商品を売る店も増えた。図には靴屋や食器屋などが描かれている。15世紀半ばの絵。



中世都市・交通路と二大商業圏

遠隔地貿易は、まず地中海商業圏で発達した。**ヴェネツィア**・ジェノヴァ・ピサなどイタリアの港市には、ムスリム商人を通じた東方貿易(レヴァント貿易)によって、エジプト産の小麦・砂糖、南アジア・東南アジア産の**香辛料**・宝石、中国産の絹織物・陶磁器など奢侈品がもたらされた。また、ミラノ・**フィレンツェ**などの内陸都市も毛織物業や金融業で栄えた。さらに、高度な灌漑技術をとまなうサトウキビ・綿花・オレンジ・ブドウなどの栽培が西アジアからイベリア半島に伝わったのも、地中海を結ぶ活発な交流の結果であった。

ついで重要なのは、北海・バルト海を中心として新たに成立した北ヨーロッパ商業圏である。**リューベック**・ハンブルク・ブレーメンなど北



ドイツの諸都市は、海産物・木材・穀物などを取引し、またガン(ヘント)・ブリュージュなど**フランドル地方**の都市は毛織物生産で繁栄した。イギリスではロンドンが北海貿易の中心で、フランドルに毛織物の原料である羊毛を輸出した。さらに、これら2つの



ヴェネツィア 多くの島々と運河からなるヴェネツィアは、東方貿易で発展し、「水の都」「アドリア海の女王」と呼ばれた。

大商業圏を結ぶ内陸の通商路にも都市が発達し、とくにフランスの**シャンパーニュ地方**は定期市で繁栄した。そのほかにも、イタリアとドイツを結ぶ南ドイツでは、ニュルンベルクやアウクスブルクなどの都市が発展した。

リューベックのホルステン門
煉瓦造りの双塔の門で、15世紀後半の建造。ハンザ同盟の盟主としての地位と繁栄を象徴する。

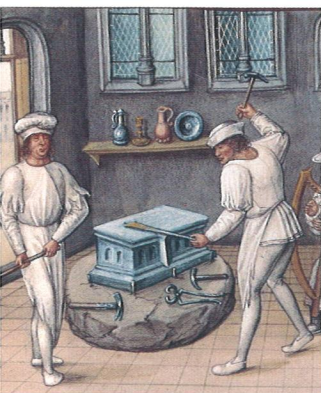
中世都市の成立

Q▶ 中世の都市は、どのような政治的地位を獲得したのだろうか。

中世都市は、司教座都市^{しきょうざ}①などが核になってできたもので、はじめ封建領主^{けん}の保護と支配を受けていたが、しだいに領主支配からの自由と自治を求めはじめた。11～12世紀以降、各地の都市はつぎつぎに**自治権**を獲得し、**自治都市**になった。

①カトリックの高位聖職者^{せいしょくしや}である司教^{かんがつ}の管轄する教会がおかれている都市。

北イタリア諸都市は、大商人や貴族に指導され、領主である司教権力を倒して自治都市(コムーネ^{comune})となり、周辺の農村も併合して一種の都市国家として完全に独立した。またドイツの諸都市は、諸侯^{しやこう}の力をおさえようとする皇帝から**特許状**^{とくきょじやう}を得て**自治権**を獲得し、皇帝直属の自由都市(帝国都市)として諸侯と同じ地位に立った。これらの有力都市は、北イタリアの**ロンバルディア同盟**^{Lombardia}や北ドイツ諸都市の**ハンザ同盟**^{Hanse}のように、共通の利害のために都市同盟を結成した。とくにリューベックを盟主とする**ハンザ同盟**は、14世紀に北ヨーロッパ商業圏を支配し、共同で武力を用いるなどして大きな政治勢力になった。他方、イギリスやフランスの諸都市は国王との結びつきが強く、のち国王の行政の中心地として成長していった。



中世の職人 商人とともに都市住民の中核をなしたのが職人であった。職人は年季奉公のち、各地を遍歴した。図は鍛冶屋のもの。

① ドイツでは、農奴が荘園から都市に逃れて1年と1日住めば自由な身分になるとされ、「都市の空気は(人)を自由にする」といわれた。

都市の自治と市民たち

Q> 中世の都市には、どのような人々が生活していたのだろうか。

自治都市のなかで、市民たちは封建領主の束縛から逃れて自由を手にした。周辺の荘園からは、農奴たちが自由を求めて都市に流れこむこともあった①。

各自治都市は、独自の行政組織をもって自治にあたった。自治運営の基礎になった組織が、ギルドと呼ばれる同業組合である。はじめ市政を独占していたのは、遠隔地貿易に従事する大商人を中心とした商人ギルドであった。しかしのちには、これに不満をもった手工業者が職種別の同職ギルド(ツunft)をつくって分離し、商人ギルドと争いながら市政への参加を実現していった(ツunft闘争)。同職ギルドの組合員は、独立した手工業経営者である親方であった。親方は職人や徒弟を指導して労働させ、彼らのあいだには厳格な身分序列があった。ギルドは自由競争を禁じ、商品の品質・規格・価格などを規約によって細かく統制し、非組合員の商業活動を禁止して市場を独占した。このギルド的規制は、手工業者の経済的地位を安定させたが、のちに経済の自由な発展をさまたげるようになった。

都市の上層市民のなかには、アウクスブルクのフッガー家のように神聖ローマ皇帝に融資してその地位を左右したり、フィレンツェのメディチ家のように一族から教皇を出す富豪も現れた。

東ヨーロッパ世界の展開

2

Q> ビザンツ帝国とその周辺には、どのような独自の世界が成立したのだろうか。

ビザンツ帝国の統治とその衰退

Q> ビザンツ帝国の衰退には、どのような要因があったのだろうか。

ビザンツ帝国は6世紀のユスティニアヌス大帝の死後、イタリアをランゴバルド王国やフランク王国に奪われ、また7世紀にはイスラーム勢力の進出でシリア・エジプトを失った。さらに、多くのスラヴ人がバルカン半島に移住し、中央ユーラシアからはトルコ系のブルガール人も進出するなどして、帝国はしだいに支配圏を縮小させていった。

7世紀以降、ビザンツ帝国はこうした異民族の侵入に対処するため、帝国領をいくつかの軍管区(テマ)にわけ、その司令官に軍事と行政双方の権限を与える**テマ制**をしいた。軍管区では、農民に土地を与えるかわりに兵役義務を課す屯田兵制がおこなわれたため、小土地所有の自由農民が増え、彼らが帝国を支える**基盤**となった。

10世紀～11世紀前半にかけて、ビザンツ帝国はいったん勢力を回復したが、11世紀後半にはセルジューク朝の侵入を受けた。また11世紀末以降、軍役奉仕と引きかえに貴族に領地を与える**プロノイア制**がおこなわれるようになると、貴族は大土地所有者として勢力を拡大し、皇帝の権力は衰えていった。さらに13世紀前半には、第4回十字軍がコンスタンティノープルを奪って**ラテン帝国**を建てるなど、国内は混乱した。その後、ビザンツ帝国は復活したが、もはやかつての勢いは戻らず、ついに1453年**オスマン帝国**に滅ぼされた。

ビザンツ文化

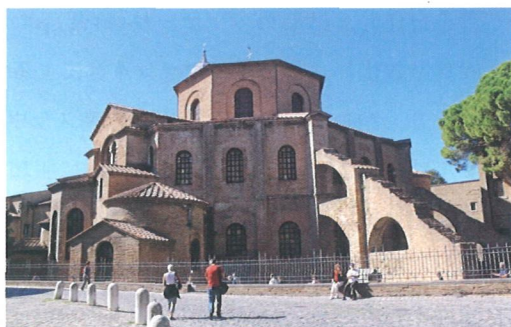
Q ビザンツ文化が果たした世界史的な意義は、どのようなものだろうか。

ビザンツ文化は、ギリシア古典文化の遺産とギリシア正教の融合に特色があり、西ヨーロッパのラテン的・ローマ＝カトリック的文化とは異なる独自性をもっていた。ビザンツ帝国では7世紀以降**ギリシア語**が公用語として用いられ、ギリシアの古典が盛んに研究された。学問の中心はキリスト教神学で、聖像崇拜をめぐる論争などがおこなわれた。美術では、ドームとモザイク壁画を特色とするビザンツ様式の教会建築が有名で、ハギア＝ソフィア聖堂やサン＝ヴィターレ聖堂がその代表である。また、聖母子像などを描いたイコン美術も、ビザンツ帝国に特徴的な美術である。

ビザンツ文化の世界史的意義は、スラヴ人をその文化圏に取り込んだこと、古代ギリシアの文化遺産を受け継いでイタリア＝ルネサンスに影響を与えたことである。



聖母子像を描いたイコン コンスタンティノープルのギリシア正教会からキエフ大公に贈られたと伝えられる。「ウラディミルの聖母」。12世紀。



サン＝ヴィターレ聖堂 6世紀前半に建てられたビザンツ様式の教会建築。内部のモザイク壁画(→p.94)も有名である。イタリア、ラヴェンナ。



サン＝ヴィターレ聖堂のモザイク

スラヴ人と周辺諸民族の自立

Q スラヴ人は、各地域でそれぞれどのように自立を歩んだのだろうか。

カルパティア山脈の北方を^{Slavs}原住地とするスラヴ人は、6世紀にな、大移動前にゲルマン人が住んでいたビザンツ帝国北方の広大な地域に速に広がった。大きくわけて東スラヴ人・南スラヴ人はビザンツ文化^{→p.98}、ギリシア正教、西スラヴ人は西欧文化とローマ＝カトリックの影響を

けつつ、自立と建国の道を歩んでいった。

ドニエプル川中流域に展開した東スラヴ人(ロシア人・ウクライナ人など)が住むロシアでは、9世紀にスウェーデン系ノルマン人がノヴゴロド国、ついでキエフ公国^{こうこく}を建国し、まもなくスラヴ人に同化した。10世紀末、^{Vladimir I}ウラディミール1世^{在位980頃～1015}は領土を広げ、キエフ公国に最盛期をもたらした。彼はギリシア正教に改宗してこれを国教とし、ビザンツ風の専制君主^{せんせいくん}政を取り入れた。その後、農民の農奴化と貴族の大土地所有が進み、大土地所有者である諸侯が多数分立して国内は分裂した。13世紀にバトゥの率いるモンゴル軍が侵入し、南ロシアを含むキプチャク＝ハン国(ジョチ＝ウルス)を建てると、キエフ公以下^{→p.144}



10世紀末頃の東ヨーロッパ

① これをロシアでは「タタール(モンゴル)のくびき」と呼んだ。

② ローマ皇帝の称号であった「カエサル」のロシア語形。のイヴァン4世の時に正式の称号となった。

の諸侯は以後、約240年間にわたってモンゴルの支配に服した①。

15世紀になると、商業都市モスクワを中心とした^{Moskva}モスクワ大公国^{たいこうこく}が急速に勢力をのばし、大公^{Ivan III}イヴァン3世^{在位1462～1505}の時代に東北ロシアを統一して、1480年にはモンゴルの支配から脱した。彼は諸侯の力をおさえて強大な権力を握り、ビザンツ帝国最後の皇帝の姪と結婚してローマ帝国の後継者^{しや}を自任し、はじめてツァーリ^{Czar}(皇帝)②の称号を用いた。また、彼は農奴制を強化し、その孫イヴァン4世による中央集権化に道を開いた。^{→p.195}

一方、バルカン半島に南下した南スラヴ人のなかで最大勢力であった^{Serbs}セルビア人は、はじめビザンツ帝国に服属してギリシア正教に改宗したが、12世紀に独立し、14世紀前半にはバルカン半島北部を支配する強国になった。同じ南スラヴ人のクロアチア人などは、西方のフランク王国の影響下でローマ＝カトリックを受け入れた。しかし、セルビアを



クラクフのヴァヴェル城 ヴィスワ川に面する王城。クラクフは11世紀から17世紀まで、ポーランドの首都であった。

じめ南スラヴ人の大半は、14世紀末以降にオスマン帝国の支配下
→p.162
におかれるようになった。

西スラヴ人(ポーランド人・チェック人など)は、西ヨーロッパの影響
を受けてローマ＝カトリックに改宗した。ポーランド人は10世紀頃建国し、

5 14世紀前半にはカジミェシュ(Casimir 在位1333～70)大王のもとで繁栄した。その
北方にいたバルト語系のリトアニア人は、東方植民を進めていたドイツ
騎士団に対抗するため、14世紀後半にポーランドと同君連合③を結んで
→p.119
ヤゲウォ(Jagiellonowie 1386～1572)朝リトアニア＝ポーランド王国をつくり、16世紀に
Czechs Böhmen
もっとも強大になった。チェック人は、10世紀にベー

10 メン(Böhemia)王国を統一したが、ドイツとの関係が
密接で、11世紀には神聖ローマ帝国に編入された。

東ヨーロッパの非スラヴ系諸民族も自立の道を歩ん
だ。ブルガール人は、7世紀にバルカン半島北部でブル
ガリア帝国を建国し、その後スラヴ人の影響を受け
15 てギリシア正教に改宗した。ブルガリア帝国はビザン
ツ帝国に併合されたのち、12世紀に再び独立したが、
14世紀にはオスマン帝国に征服された。マジャール人は、
黒海北岸からドナウ川中流のパンノニア平原に移動し、
10世紀末にハンガリー王国を建国してローマ＝
20 カトリックを受け入れた。ハンガリー王国は15世紀に
もっとも繁栄したが、やはり16世紀にはオスマン帝国
の支配下に入った。



聖ワシーリー聖堂 イヴァン
4世が16世紀半ばにカザン＝
ハン国(→p.148)を征服したこ
とを記念して建立した聖堂。
ビザンツ様式から変容した、
ロシア独特のドームが複合さ
れている。モスクワ。

③ 2つあるいはそれ以上の独
立した国々が、一人の共通の
君主のもとで連合すること。



14世紀半ば～15世紀の東ヨーロッパ

西ヨーロッパ世界の変容

3

Q▶ 西ヨーロッパ各地での中央集権国家の形成に向けた動きにおいて、各国にはどのような共通点と相違点があったのだろうか。

① こうした事態を「封建反動」と呼ぶ。

② ワット＝タイラーの乱の思想的指導者であった聖職者ジョン＝ボール(？～1381)は、「アダムが耕しイヴが紡いだ時、だれが貴族であったか」と説教し、身分制度を批判した。

封建社会の衰退

Q▶ 封建社会の仕組みは、なぜ解体に向かったのだろうか。

14世紀に入ると、西ヨーロッパの封建社会の仕組みはしだいに衰退に向かった。貨幣経済が浸透するにつれて、領主は貨幣を手に入れるため、賦役をやめて直営地を分割して農民に貸し与え、生産物や貨幣で地代をおさめさせるようになった。農民は市場で生産物を売り、地代をおさめ

た残りの貨幣を蓄えて経済的に力をつけていった。またこの頃から気候が寒冷化し、凶作や飢饉、黒死病(ペスト)の流行、あいつぐ戦乱などで農業人口が減少した。このため領主は荘園での労働力を確保するために農民の待遇を向上させなければならず、農民の身分的束縛はますますゆるめられた。こうして荘園にもとづく経済体制は崩れはじめた。

イギリス・フランス・西南ドイツなどでは、農奴身分の束縛から解放され、社会的地位を向上させた農民が、自営農民に成長していった。とくに貨幣地代が普及したイギリスでは、かつての農奴はヨーマンと呼ばれる独立自営農民になった。

やがて経済的に困窮した領主が再び農民への束縛を強めようとする①、農民たちはこれに抵抗し、農奴制の廃止などを要求して各地で大規模な農民一揆をおこした。

14世紀後半のフランスのジャックリーの乱やイギリスのワット＝タイラーの乱②がそ



黒死病の流行 この疫病により、当時の西ヨーロッパの人口の約3分の1が失われたという。図は死者を埋葬する人々。



ワット＝タイラーの乱 農民軍を指揮するワット＝タイラー(左手前)と聖職者ジョン＝ボール(中央馬上)。反乱はワット＝タイラーの殺害とジョン＝ボールの処刑で終わった。

れである。一揆はいずれも鎮^{ちんあつ}圧されたが、領主層の窮乏^{きゅうぼう}はますます深刻になっていった④。

一方、商業圏が拡大するにつれて、都市の市民たちは市場を統一する中央集権的な政治権力の出現を望んだ。そこで国王は彼らと協力して諸侯をおさえ、権力集中をはかるようになった。力を失った諸侯や騎士は国王の宮廷^{きやうてい}に仕える廷臣^{ていしん}になり、領地では農民から地代を取り立てるだけの地主^{じぬし}となった。このようにして封建社会の政治体制は解体に向かい、西ヨーロッパ各国は中央集権国家に向けてそれぞれの歩みを始めた。

教皇権の衰退

➡ 教皇権の衰退と王権の伸張とのあいだには、どのような関係があったのだろうか。

教皇の権威は、十字軍の失敗から傾きはじめ、各国で王権が成長する

とともに衰えをみせるようになった。13世紀末に教皇となった**ボニファ**

ティウス8世は教皇権の絶対性を主張し、聖職者への課税に反対してイギリス・フランス国王と争った。しかし、1303年に教皇はフランス国王

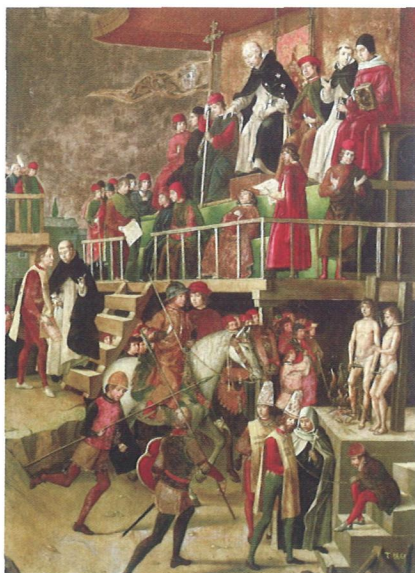
フィリップ4世によって捕らえられ、まもなく釈放されたが屈辱^{くつじよく}のうちに死んだ(アナーニ事件)。

その後、教皇庁はローマから南フランスの都市**アヴィニョン**に移され、以後約70年間この地にとどまった。この事態は「教皇のバビロン捕囚」(1309~77年)と呼ばれた。

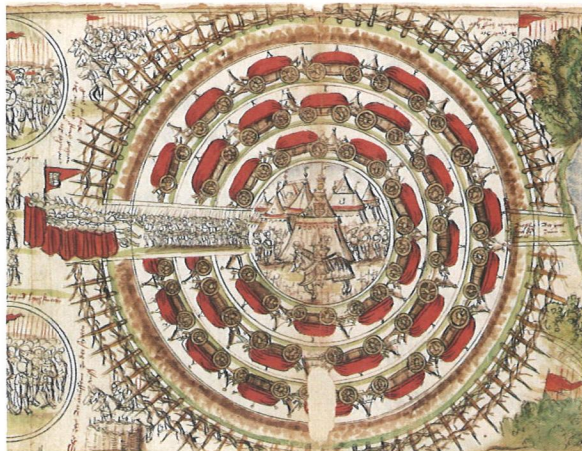
のちに教皇がローマに戻ると、アヴィニョンにもフランスのあと押しを受けて別の教皇が立ち、両教皇がともに正統性を主張して対立した。これを**教会大分裂**

(大シスマ)と呼び、教皇と教会の権威の失墜は決定的となった。それとともに教会の堕落や腐敗を批判する運動が各地でおこったが、教会はこれらの動きを、異端審問や魔女裁判によって容赦なく罰しようとした。

④ 14~15世紀に火砲が発明されて戦術が変化(→p.178)すると、かつて一騎討ち戦の花形であった騎士はその地位を弱め、いっそう没落した。



異端審問 12世紀以降、カタリ派(→p.129)などの異端がカトリック教会を動揺させ、14世紀に至るまで、教皇の権限のもとで異端に対する審問が盛んにおこなわれた。図はスペインの裁判所で火刑がおこなわれようとしている場面。



フス戦争と戦術 フス派は、装甲荷車を連結した「動く城塞」とマスカット銃を用い、神聖ローマ皇帝の軍勢を撃破した。図は、同時代(15世紀)の写本の挿し絵。

①当時のイギリス議会やフランスの全国三部会など、3身分の代表者からなる議会を身分制議会といい、このほかドイツ・スペイン・北欧など各国に成立した。

14世紀後半、イギリスのウィクリフは、聖書こそ信仰の最高の権威であって、教会はその教えから離れていると批判し、聖書を英訳するなどして自説の普及につとめた。ベーメンのフスはウィクリフの説に共鳴し、教皇らの破門にもひるまず教会を批判した。神聖ローマ皇帝の提唱によって開かれたコンスタンツ公会議(1414～18年)は、彼ら2人を異端と宣告してフスを火刑に処するとともに、ローマの教皇を正統と認めて教会大分裂を終わらせた。しかし、ベーメンではチェコ民族運動と結んだフス派の反乱(フス戦争)が長く続くなど、もはや教皇権の勢いは戻らなかった。その後もキリスト教の革新運動はあとを絶たず、やがて近世初頭の宗教改革につながるのである。

イギリスとフランス

Q 身分制議会は、各国での王権の伸張とどのような関わりをもっていたのだろうか。

13～14世紀以後ヨーロッパ各国の王は、課税などを要請するため、貴族・聖職者および都市の代表が出席する身分制議会を開き、話し合いを通して国内統一をはかった。

イギリスは、ノルマン朝がウィリアム1世の征服によって建てられたことから、例外的に最初から王権が強かった。血統の関係上フランスを出身地とするプランタジネット朝初代の王ヘンリ2世は、フランス西半部をも領有して大勢力を築いていた。ところがその子ジョン王は、フランス国王フィリップ2世と争ってフランスにおける領地の大半を失い、さらに教皇インノケンティウス3世とも争って破門された。そのうえ財政困難におちいって重税を課したため、貴族は結束して王に反抗し、1215年に大憲章(マグナ=カルタ)を王に認めさせた。これは、新たな課税には高位聖職者と大貴族の会議の承認を必要とすることなどを定めたもので、ここにイギリス立憲政治の最初の基礎がおかれた。

つぎのヘンリ3世は大憲章を無視したため、シモン=ド=モンフォールは貴族を率いて反乱をおこし、王を破った。そして以前からあった高位聖職者・大貴族の会議に州や都市の代表を加えて国政を協議した(1265年)。

大憲章(マグナ=カルタ)

1. まず第一に、朕は、イングランドの教会は自由であり、その権利を減ずることなく、その自由をおかされることなく有すべきことを、神に容認し、この朕の特権状によって、朕および朕の後継者のために永久に確認した。……
12. いかなる軍役免除金①また御用金②も、王国の全体の協議によるのでなければ、朕の王国において課せられるべきでない。ただし、朕の身体をうけ戻し③、朕の長子を騎士に叙し④、朕の長女を一度結婚せしめる場合は除かれる。そしてこれらについても正当な御用金のみが課せられるべきである。またこのことはロンドン市からの御用金についても当てはまるべきである。
13. またロンドン市は、すべてのその古来の特権と、水路陸路を問わず自由な関税とを有すべきである。さらに朕はすべてのほかの都市、市邑、町、港がすべてその特権と自由な関税とを有すべきことを望み、また認可する。

(江上波夫監修『新訳 世界史史料・名言集』)

- ①王に従って戦いにおもむくわりに出す金。
- ②王に対する臨時の献金。
- ③王が捕虜になった際、身代金を払うため金が必要な場合を指す。
- ④王の長子が騎士叙任の式をあげるのに資金が必要な場合を指す。



Q▶ これは、ジョン王が貴族に認めた諸権利を長文の特許状に書き記したものである。この文書が、のちにイギリス立憲政治の始まりとみなされたのはなぜだろうか。

これがイギリス議会の起源である。1295年にはいわゆる模範議会②が招集され、さらに14世紀半ばには、議会は高位聖職者と大貴族を代表する上院と、州と都市を代表する下院とにわかれ、法律の制定や新課税には下院の承認が必要になった。イギリスでは騎士が早くから軍事的性格を失って地方の地主であるジェントリ(郷紳)となり、州を代表して都市の市民と並ぶ下院の勢力となった。

フランスのカペー朝のもとでは、はじめ王権はきわめて弱い勢力で、大諸侯の勢力が強かった。しかし、12世紀末に即位した国王フィリップ

2世は、ジョン王と戦って国内のイギリス領の大半を奪い、またルイ9

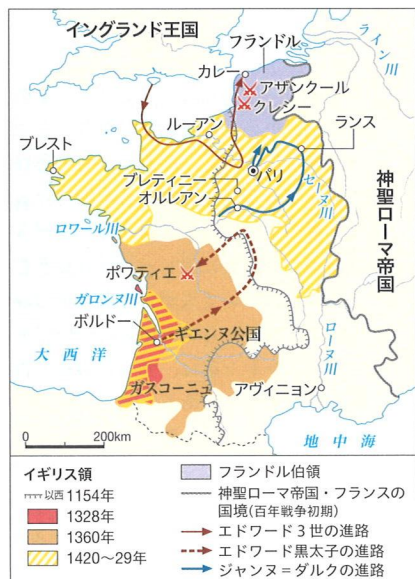
世は、南フランス諸侯の保護を受けた異端のアルビジョワ派(カタリ派)を征服して王権を南フランスにも広げた。さらにフィリップ4世は、ローマ教皇ボニファティウス8世との争いに際して、1302年に聖職者・貴族・平民の代表者が出席する全国三部会を開き、その支持を得て教皇をおさえ、王権をさらに強化した。

②高位聖職者・大貴族のほか各地から騎士・市民・下級聖職者の代表が招集され、これがのちに模範的な議会構成とされたので、このように呼ばれた。

③全国の代表者が集まった全国三部会のほかに、地方でそれぞれ開かれた地方三部会もあった。



アルビジョワ派の追放 図は南フランスの都市カルカソンヌからアルビジョワ派が追放される様子。アルビジョワ派は、禁欲主義を特徴とするカタリ派の南フランスでの呼び名で、カトリックの聖職者の墮落に反対する運動として、南フランスのアルビを中心に広まった。カルカソンヌはその拠点の一つ。



百年戦争当時の英仏関係

クレシーの戦い 1346年にエドワード3世率いるイギリス軍がフランスの騎士軍を破った戦い。イギリスの長弓隊(右)がフランスの十字弓隊(左)を圧倒した。15世紀の年代記の挿し絵。

百年戦争とバラ戦争

Q 百年戦争によって、イギリスとフランスはどのように変容したのだろうか。

フランス国王は、毛織物産地のフランドル地方を直接支配下におこうとしたが、この地方に羊毛を輸出していたイギリス国王がこれを阻止しようとした。カペー朝が断絶してヴァロワ朝がたつと、イギリス国王エドワード3世は、母がカペー家出身であることからフランス王位継承権を主張し、これをきっかけに両国のあいだに百年戦争が始まった。

① 両派の記章がそれぞれ赤バラと白バラであったとする後世の想像から、このように呼ばれる。

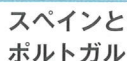


ジャンヌ=ダルク 15世紀写本の挿し絵。

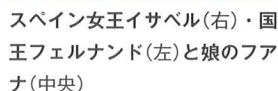
はじめは長弓兵を駆使したイギリス軍が、クレシーの戦いでフランス騎士軍を破るなど優勢で、エドワード黒太子の活躍によりフランス南部を奪った。フランス国内はさらに黒死病の流行やジャックリーの乱などで荒廃し、シャルル7世の時には王国は崩壊寸前の危機にあった。この時、神の託宣を信じた農民の娘ジャンヌ=ダルクが現れてフランス軍を率い、オルレアンを包囲を破ってイギリス軍を大敗させた。フランスは勢いを盛り返し、ついに戦争はフランスの勝利に終わった。この長期の戦争のため、フランスでは諸侯・騎士が没落した。その一方でシャルル7世は大商人と結んで財政を立て直し、常備軍を設置したので、以後、中央集権化が急速に進展した。

一方、戦後のイギリスではランカスター家とヨーク家による王位継承の内乱がおこった。これをバラ戦争という。イギリスの諸侯・騎士はイギリスはカレー以外の大陸領をすべて失うことになった。

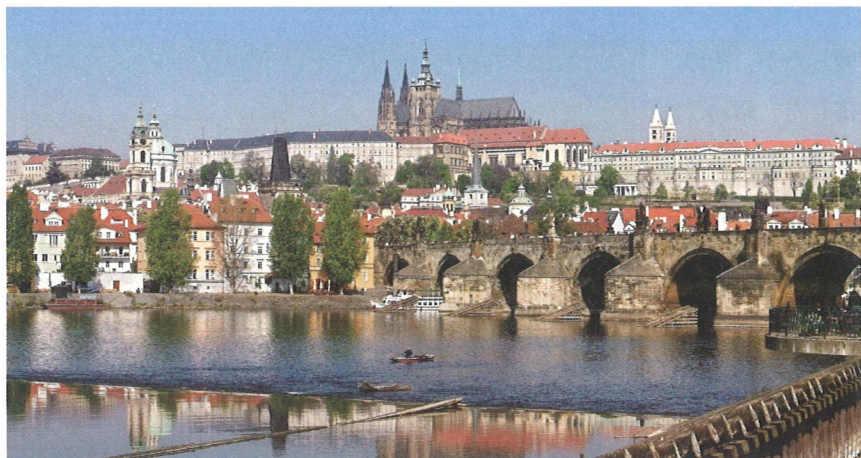
1485~1603 とうち
ヘンリ7世は統治制度を整え、王権
に反抗する者を処罰して絶対王政に道
→p.185
を開いた。他方、ケルト系の隣国ウェ
ールズは1536年にイギリスによって併
へい
合されたが、スコットランドはなお独
立を保ち続けた②。



ポルトガルは、12世紀にカステイリヤから独立したのち、15世紀後半に国王**ジョアン2世**が貴族の反乱をしずめて王権を強化した。彼はまた、バルトロメウ＝ディアスの航海を援助するなどしたため、ポルトガルはスペインとともにヨーロッパ人の海洋進出の先駆けとなった。



3. 西ヨーロッパ世界の変容 131



プラハの町並みとカレル橋
プラハはベーメン王国の都
で、同地を拠点としたカー
ル4世(ベーメン国王とし
てはカレル1世)が都市整
備につとめた。市内にはヴ
ルタヴァ(モルダウ)川が流
れ、多くの尖塔が建てられ
たことから、「百塔の街」と
も呼ばれる。

ドイツ・スイス・ イタリア・北欧

Q 神聖ローマ帝国で中央集権が進まなかったのは、な
ぜだろうか。

ドイツ(神聖ローマ帝国)では大諸侯の力が強く、また自由都市もこれ
と並ぶ独立勢力となったため、政治的分裂が深まっていった。シュタ

Staufen

ウフェン朝が断絶したあと、政治的混乱は事実上の皇帝不在の「大空位」
1138~1208, 1215~54

大空位
1256~73

時代」の時に頂点に達した。その後、皇帝カール4世は、こ
うした混乱を避けるため1356年に「金印勅書」を發布して、
神聖ローマ皇帝選挙の手続きを定めるとともに、皇帝選出
権を聖俗の七選帝侯に認めた。

14世紀以降のドイツでは、帝国ではなく大諸侯の領地であ
る領邦ごとに集権化が進められた。有力な領邦はみずか
ら身分制議会を開き、帝国から自立する勢いをみせた。15
世紀前半以降、皇帝はハプスブルク家から出されるよう
になり、帝国統一につとめたが失敗した。国内には大小の諸
侯や自由都市など、あわせて300ほどの領邦が分立するよ
うになり、統一はますます難しくなった。

一方、かつてスラヴ人やマジャール人が住んでいたエル
ベ川以東の地には、12~14世紀にかけてドイツ人による大
規模な植民がおこなわれ(東方植民)、ブランデンブルク辺
境伯領やドイツ騎士団領などの諸侯国がつくられた。これ
らの地方では15世紀以降、西ヨーロッパ向けの穀物生産が
大規模におこなわれるようになった。



15世紀末のドイツ・スイス・イタリア・北欧

「金印勅書」、ローマ王の選挙について

7名の選帝侯は、フランクフルト市入城後^{にゅうじょう}ただちに、聖バルトロメウス教会で聖霊^{せいれい}のミサをとなえる。その後、聖なる福音書^{ふくいんしょ}にかけて、俗語^{そくご}(ドイツ語)にてつぎのごとく宣誓をおこなう。

「選帝侯である私は、目の前の聖なる福音書に対して、以下のごとく誓います。私は、神聖なるローマ帝国への忠誠にかけて、私の思慮^{しりょ}分別^{ぶんべつ}と見識に従い、キリスト教徒である人民のために、この世の長^{おき}である皇帝の地位につくべきローマ王を選ぶことを。その際、いかなる談合^{だんごう}、報酬^{だいにしやう}、代償や約定なしに、投票をおこなうことを。」

宣誓ののち、選帝侯はすみやかに選挙をおこない、彼らの多数^①が、キリスト教徒である人民の名のもとに、皇帝位につくべきローマ王を選ばない限り、フランクフルト市から立ち去ってはならない。

また、先の宣誓後30日をこえた場合は、彼らはパンと水しか口にすることができない。
(千葉敏之抄訳)

①選挙は多数決であるが、多数で選ばれたローマ王も全会一致で選出されたものとみなされた。



「金印勅書」の印章

Q 「金印勅書」の発布によって、神聖ローマ皇帝の地位はどのようにかわったのだろうか。

スイス地方の農民は、13世紀末にハプスブルク家の支配に反抗して独立闘争を始め、今日のスイス連邦の母体をつくった。その後、1499年には神聖ローマ帝国から事実上独立し、1648年のウェストファリア条約で^{→p.188}国際的に独立国として承認された。

5 イタリアは、南部では両^{りやう}シチリア王国がシチリア王国とナポリ王国に分裂し、中部の教皇領^{きやうこうりやう}を挟んで、北部ではヴェネツィア・フィレンツェ・ジェノヴァ・ミラノなどの都市国家が分立していた。神聖ローマ皇帝がイタリア政策によって介入してくると、諸都市の内部では教皇党^{Guelfs} (ゲルフ)と皇帝党^{Ghibellines} (ギベリン)がたがいに争い、国内統一をさらに困難なものとした。
^{→p.98}

10 北欧では、14世紀末にデンマークの摂政^{せつしやう}マルグレーテ^{Margrethe}が主導して、デンマーク・スウェーデン・ノルウェーの3国のあいだに^{1353~1412}カルマル同盟^{Kalmar}が結ばれ、同君連合^{どうくんれんごう}の王国が成立して一大勢力となった。



開墾する修道士 修道院は開墾運動を指導するとともに、農業技術の向上にも貢献した。シトー修道会の写本より。12世紀。

①このほか著名な修道院運動として、13世紀にフランチェスコ(1181頃～1226)が始めたフランチェスコ修道会、ドミニコ(1170頃～1221)が始めたドミニコ修道会などがあった。とくにこの2つの修道会は民衆のなかに入って教化したので、**托鉢修道会**とも呼ばれる。



騎士道物語

西ヨーロッパの中世文化

4

Q▶ 中世の文化は、のちのヨーロッパにどのような影響を与えたのだろうか。

教会と修道院

Q▶ 中世の西ヨーロッパにおいて、キリスト教はどのような文化的役割を果たしたのだろうか。

中世の西ヨーロッパはキリスト教の時代であり、人々の日常生活全般にローマ＝カトリック教会の絶大な権威がいきわたっていた。出生・結婚・臨終など人生の重要な節目に際して秘蹟の儀式を受けることは、教会の重要な仕事であった。魂の救済ができるのは教会のみであるとされ、教会の外に追放される破門はきわめて重い罰であった。

世俗を離れた修行の場である修道院も、大きな文化的役割を果たした。修道院運動は、6世紀にベネディクトゥスがイタリアのモンテ＝カシノに開いた**ベネディクト修道会**に始まる。同会は清貧・純潔・服従のきびしい戒律を修道士に課し、以後、各地に広がった。その「祈り、働け」のモットーは、生産労働を奴隷の仕事と考えていた古典古代以来の労働に対する考え方を大きくかえた。12～13世紀は、森林を切りひらいて耕地を広げる**大開墾時代**であったが、その先頭に立ったのは**シトー修道会**をはじめとする修道院であった①。

学問もまたキリスト教の影響下にあった。神学が最高の学問とされ、哲学や自然科学はその下におかれた。当時の学者・知識人は聖職者や修道士であり、彼らは学問の国際的共通語である**ラテン語**を用いていた。

中世文化一覧表

【神学・スコラ学】

アンセルムス……………実在論
アベラール……………唯名論
トマス＝アクィナス……………『神学大全』
ウィリアム＝オブ＝オッカム……………唯名論
ロジャー＝ベーコン……………自然科学者

【大学】

ボローニャ大学……………法学
パリ大学……………神学
サレルノ大学……………医学
オクスフォード大学……………神学
ケンブリッジ大学……………神学

【建築】

ロマネスク様式……………ピサ大聖堂
シュバイアー大聖堂
ゴシック様式……………ノートルダム大聖堂
シャルトル大聖堂
ランス大聖堂
ケルン大聖堂

【文学(騎士道物語)】

『アーサー王物語』(イギリスのケルト人の伝説から発展)
『ニーベルンゲンの歌』(ゲルマンの英雄叙事詩)
『ローランの歌』(カール大帝時代の騎士の武勇が題材)

学問と大学

Q> 大学という組織はどのように生まれたのだろうか。

教会の権威の理論的確立のために、信仰を論理的に体系化しようとする**スコラ学**は中世西ヨーロッパに特有の学問で、**实在論**と**唯名論**とのあいだの**普遍論争**②はその中心的議論であった。前者の議論は**アンセルムス**、後者は**アベラール**や**ウィリアム＝オブ＝オッカム**によって代表され、とくに**ウィリアム＝オブ＝オッカム**は近代合理思想の基礎を築いた。

12世紀には、ビザンツ帝国やイスラーム圏からもたらされたギリシアの古典が、ギリシア語やアラビア語から本格的にラテン語に翻訳されるようになり、それに刺激されて学問や文芸も大いに発展した③。これを**12世紀ルネサンス**という。**スコラ学**は**アリストテレス**哲学の影響を受けて壮大な体系となり、**トマス＝アクィナス**により大成されて**教皇権**の理論的支柱となった。イスラーム科学の影響も大きく、実験を重視する**ロジャー＝ベーコン**の自然科学はのちの近代科学を準備するものであった。

大学が誕生するのも12世紀頃からである。大学は教授や学生の組合としてできたのが始まりで、教皇や皇帝の特許状によって自治権を与えられた一種のギルドであった。おもな大学には神学・法学・医学の3学部があり、また基礎的な教養科目として自由七科④も教育された。

最古の大学といわれるイタリアの**ボローニャ大学**は法学で、またパリ大学は神学でそれぞれ有名であった。イギリスではパリ大学を模範に創設された**オクスフォード大学**と、そこからわかれてできた**ケンブリッジ大学**が、独自の**学寮(コレッジ)**制をもとに発展した。

② 普遍(個々別々のものをこえてあらゆるものに共通するもの)は、現実に実体として存在するか、それとも思考のなかに存在するにすぎないのかの論争。前者を主張するのが**实在論**、後者を主張するのが**唯名論**である。

③ イベリア半島のトレドやシチリア島のパレルモなどが、こうした翻訳活動の中心であった(→p.115)。

④ 文法学・修辞学・論理学の3学科と、算術・幾何・天文・音楽の4学科を指す。



中世の大学の講義風景 教授の座る講座(カテドラ)は権威の象徴で、学生のベンチは粗末であった。

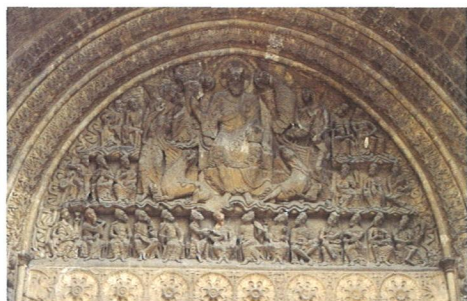
美術と文学

Q> 中世の西ヨーロッパの美術や文学は、その時代をどのように反映しているのだろうか。

中世の美術を代表するものは、**教会建築**である。11世紀には厚い石壁に小さな窓をもつ重厚な**ロマネスク様式**が生み出され、シュパイアー大聖堂やピサ大聖堂などが有名である。つづく12世紀に現れた**ゴシック様式**は、頭部のとがった尖頭アーチと高くそびえる塔を特徴とする。壁を

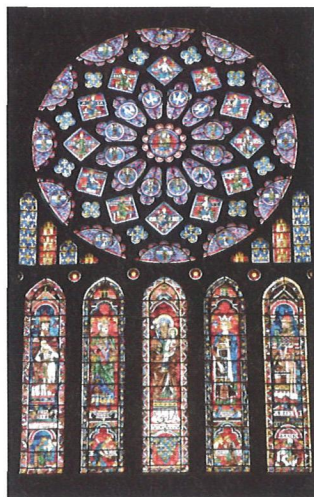


シュバイアー大聖堂 ドイツ中南部シュバイアーにある大聖堂。12世紀半ばに完成した、ロマネスク様式による建築の代表例の1つ。



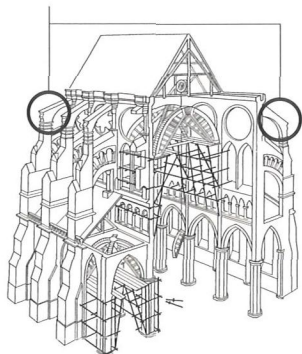
ロマネスク様式の彫刻 フランス南部モワサックにある、サン＝ピエール修道院付属教会のタンパン（扉口上の半円形壁面）。中央の人物は最後の審判にのぞむキリスト。12世紀。

ランス大聖堂 フランス北東部ランスにある大聖堂。歴代フランス王の戴冠式がおこなわれた。ゴシック様式による建築の代表例の1つ。



シャルトル大聖堂のステンドグラス フランスのシャルトル（パリの南西87km）にある大聖堂のステンドグラスはとくに美しく保存がよい。12～13世紀の建造。

フライング＝バットレス



ゴシック様式の構造 フライング＝バットレス（飛梁）と呼ばれる、外壁を外側から支えるアーチ状の梁によって、建築の高層化が可能となった。

薄くする技術が進歩したため広くなった窓は、美しいステンドグラスで飾られ、外壁や柱には彫刻がほどこされた。天上の神をたたえる厚い信仰心を象徴するゴシック様式の教会は、繁栄する商人の経済力を背景に各都市に建設された。ランス大聖堂やシャルトル大聖堂がその典型である。

学問にラテン語が用いられたのに対し、口語（俗語）で表現された中世文学の代表が騎士道物語である。騎士は中世西ヨーロッパの人間の理想像で、武勇と主君への忠誠、神への信仰、女性・弱者の保護などを重視する彼らの道徳が騎士道である。このような騎士の武勲や恋愛をテーマにした文学作品として、『ローランの歌』や『ニーベルンゲンの歌』『アーサー王物語』などが知られている。また、おもに宮廷において騎士の恋愛を叙情詩にうたったのが吟遊詩人であり、その最盛期は12世紀であった。